平成２８年度全国学力・学習状況調査
帯広市の結果について

Ⅰ　調査の概要

１　調査の目的

〇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
〇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
〇以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２　調査の対象学年

市内小学校　第６学年　児童
市内中学校　第３学年　生徒

３　調査の内容

①　教科に関する調査（国語、算数・数学）

主として「知識」に関する問題	主として「活用」に関する問題
・身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 など	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力などにかかわる内容 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容 など

②　生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

児童生徒に対する調査	学校に対する調査
学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査	指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

４　調査の方式

悉皆調査（対象の全児童生徒が参加）

５　調査期日

平成２８年４月１９日（火）

６　調査を実施した学校・児童生徒数

	小学校（校）	児童（人）	中学校（校）	生徒（人）
全　国（公立）	１９、３３５	１、０２１、９１０	９、４６４	９９６、５７８
北海道（公立）	１、０４６	４０、２７７	６０７	４１、２３６
帯　広　市	２６	１、２９３	１４	１、３２２

※表中の全国及び北海道（公立）の数値は、平成２８年度全国学力・学習状況調査 調査結果のポイントについて～北海道（公立）における調査結果～より抜粋。

※ 表中の帯広市の数値は、回収した解答用紙が最も多かった科目の解答用紙で算出。

７　調査結果に関する留意事項

①　昨年度との比較について

平成２６年度から、本市全体の平均正答率の数値を明らかにした他、これまでも平均正答数等の数値を示しているが、これらの数値のみで必ずしも調査結果のすべてを表すものではなく、中央値、標準偏差等の数値や分布の状況を表すグラフの形状など他の情報と合わせて総合的に結果を分析・評価する必要がある。また、個々の設問や領域等に着目して学習指導上の課題を把握・分析し、児童生徒一人ひとりの学習改善や学習意欲の向上につなげることが重要である。

②　結果のとらえ方について

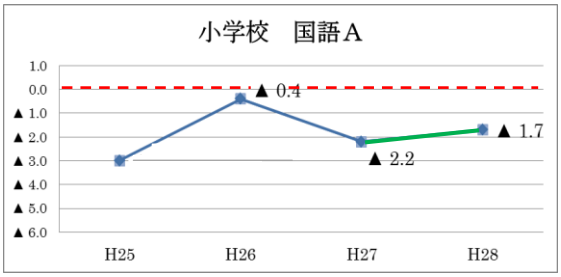
本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面であることに留意する必要がある。

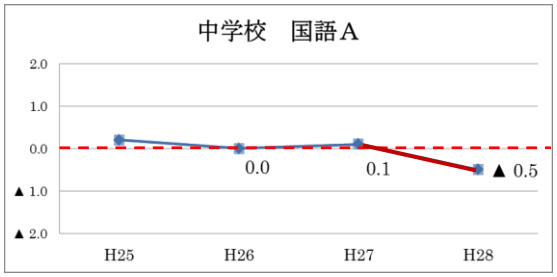
Ⅱ　平成２８年度　調査の結果

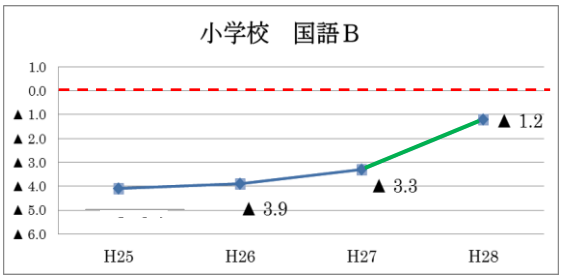
１　各科目の平均正答率

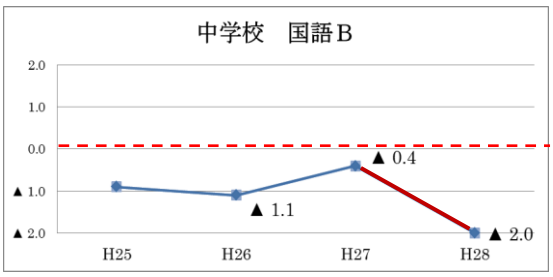
	小学校				中学校			
	国語Ａ	国語Ｂ	算数Ａ	算数Ｂ	国語Ａ	国語Ｂ	数学Ａ	数学Ｂ
全国	72.9	57.8	77.6	47.2	75.6	66.5	62.2	44.1
全道	71.0	56.0	75.3	44.5	75.1	65.0	61.8	43.3
本市	71.2	56.6	75.7	44.2	75.1	64.5	63.0	43.2
全道差	+0.2	+0.6	+0.4	−0.3	0.0	−0.5	+1.2	−0.1
全国差	−1.7	−1.2	−1.9	−3.0	−0.5	−2.0	+0.8	−0.9
H27 全国差	−2.2	−3.3	−5.6	−5.4	+0.1	−0.4	+0.2	−1.5

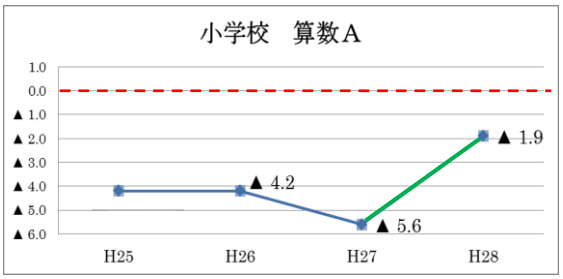
【全国と本市の平均正答率の差の推移】

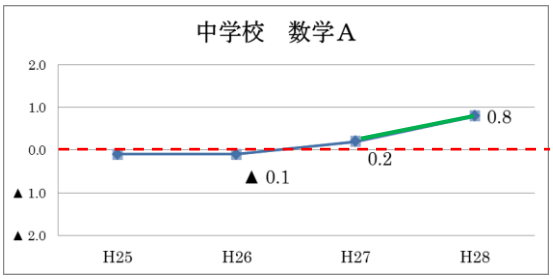


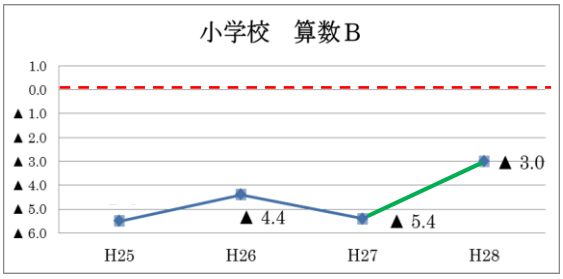


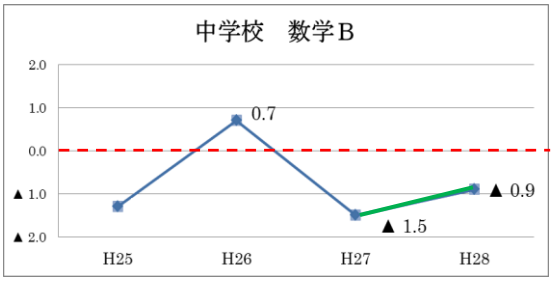












２　児童生徒の学力の状況の概観

【小学校】

●４科目ともに全国平均を下回った。

〇昨年度と比較すると、４科目とも全国平均との差が縮まってきている。特に、昨年度は５ポイント程度差があった算数Ａ・Ｂにおいて改善が見られた。

（算数Ａ：－5.6 → －1.9 ／ 算数Ｂ：－5.4 → －3.0）

【中学校】

〇数学Ａで全国平均を上回った。

〇国語Ｂを除く３科目は、全国平均から±１以内となっており、ほぼ全国平均に並んだ。

●昨年度と比較すると、国語Ａ・Ｂにおいて全国平均との差が広がった。

（国語Ａ：＋0.1 → －0.5 ／ 国語Ｂ：－0.4 → －2.0）

【市内小中学校における平均正答率の散らばり】

○　全国平均を上回った小学校は、国語Ａで８校(＋１)、国語Ｂで１１校（＋４)、算数Ａで９校（＋５)、算数Ｂで６校（＋２）であった。
　平均正答率が最も高かった学校と最も低かった学校の差は、小学校で１７．５(算数Ｂ)～２６．７（算数Ａ）ポイントである。

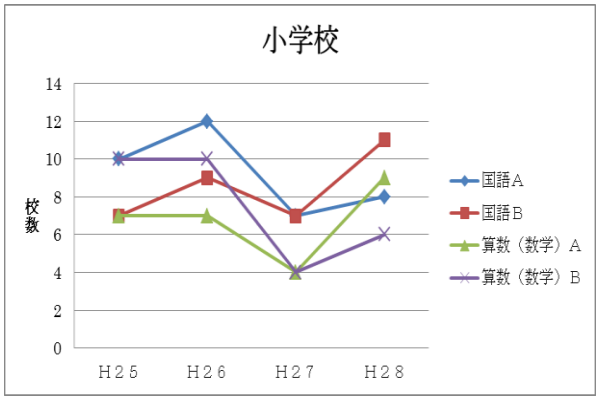
○　全国平均を上回った中学校は、国語Ａで７校（－２)、国語Ｂで６校（±０)、数学Ａで８校(±０)、数学Ｂで８校（＋４）であった。
　平均正答率が最も高かった学校と最も低かった学校の差は、中学校で９．４（国語Ａ）～２２．８（算数Ａ）ポイントである。

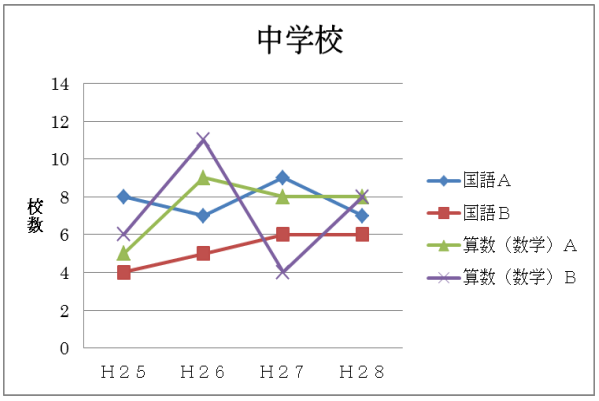
○　全道平均を５ポイント以上下回った小学校は、国語Ａで５校（＋２)、国語Ｂで３校（－６)、算数Ａで２校（－１０)、算数Ｂで４校（－８）であった。中学校では、国語Ａ、国語Ｂで０校（±０)、数学Ａで２校（＋２)、数学Ｂで２校（＋１）であった。

※（　）内の差を示す数値は平成２７年度調査結果との比較。

■　全国平均を上回った校数の推移（校数）

	小学校				中学校			
	H25	H26	H27	H28	H25	H26	H27	H28
国語A	10	12	7	8	8	7	9	7
国語B	7	9	7	11	4	5	6	6
算数(数学)A	7	7	4	9	5	9	8	8
算数(数学)B	10	10	4	6	6	11	4	8



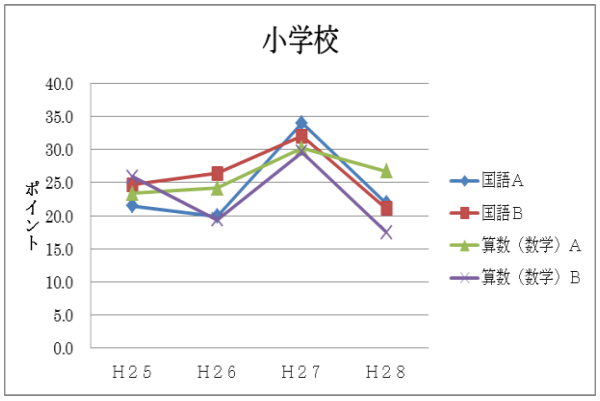


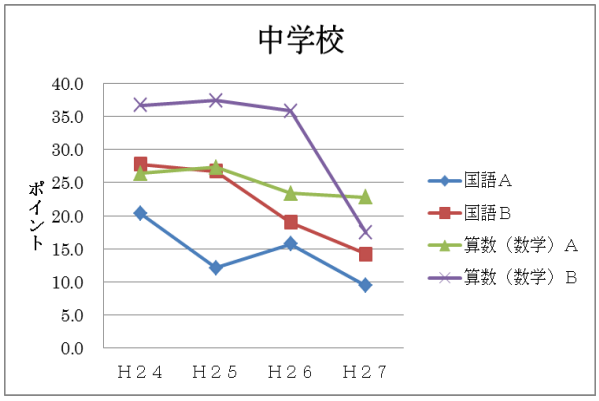
昨年度と比べて、全国平均を上回った学校数が、４科目全てで増加した。

昨年度と比べて、算数Ｂで全国平均を上回った学校数が増加した。国語Ｂと算数Ａでは、全国平均を上回った学校の増加数が昨年度と同数だった。

■　平均正答率が最も高かった学校と最も低かった学校の差の推移（ポイント）

	小学校				中学校			
	H25	H26	H27	H28	H25	H26	H27	H28
国語A	21.5	19.9	34.0	21.9	20.3	12.1	15.7	9.4
国語B	24.7	26.4	32.0	21.1	27.8	26.7	19.0	14.2
算数(数学)A	23.4	24.2	30.2	26.7	26.4	27.3	23.4	22.8
算数(数学)B	25.9	19.4	29.6	17.5	36.7	37.4	35.8	17.4



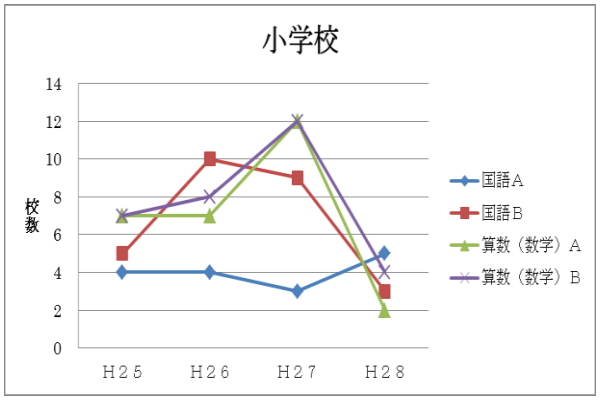


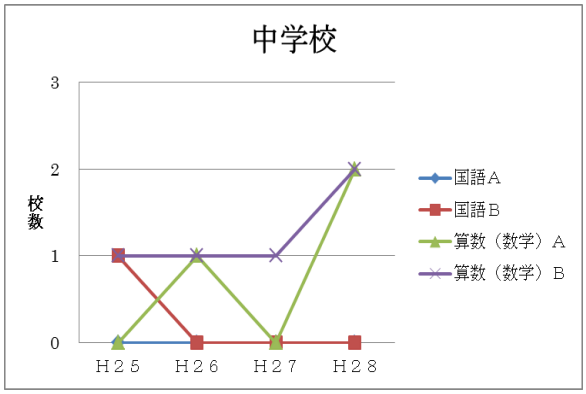
昨年度と比べて４科目全てで差が縮まった。

昨年度と比べて４科目全てで差が縮まった。

■　全道平均を５ポイント以上、下回った学校数の推移（校数）

	小学校				中学校			
	H25	H26	H27	H28	H25	H26	H27	H28
国語A	4	4	3	5	0	0	0	0
国語B	5	10	9	3	1	0	0	0
算数(数学)A	7	7	12	2	0	1	0	2
算数(数学)B	7	8	12	4	1	1	1	2





昨年度と比べて、国語Ｂ、算数Ａ・Ｂにおいて、学校数が減少した。一方、国語Ａにおいては増加した。

昨年度と比べて、数学Ａ・Ｂにおいて、学校数が増加した（計４校）。国語Ａ・Ｂにおいては、該当校はなかった。

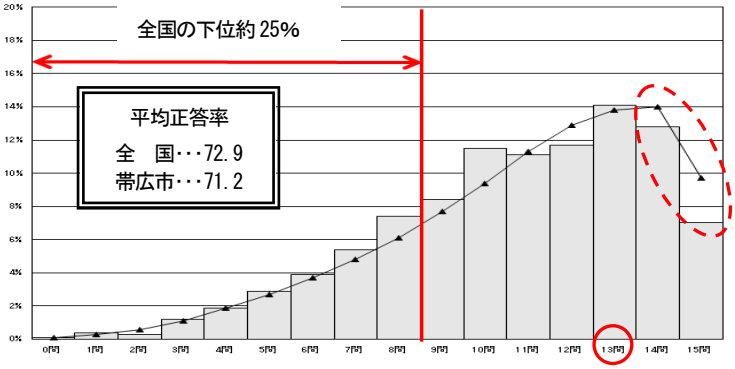
３　各科目の正答数の分布

グラフの見方	折れ線グラフ	―▲―	：全国
	柱状グラフ		：帯広市

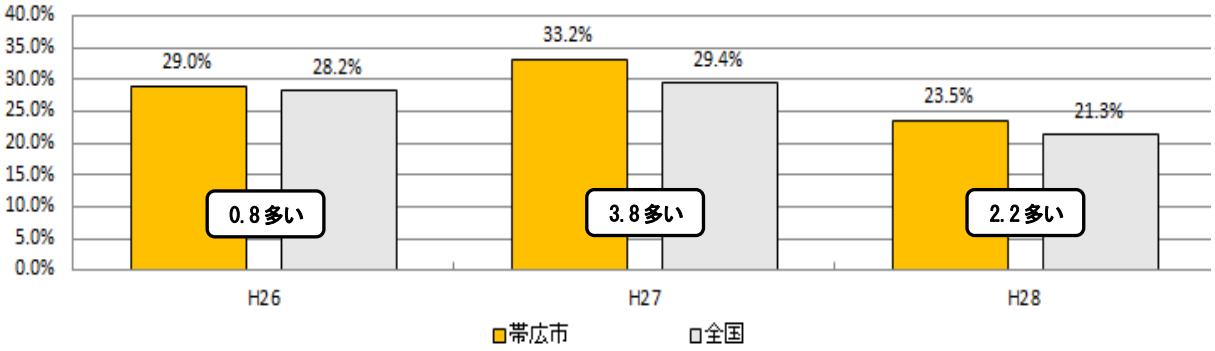
【小学校　国語Ａ】

・１５問中、正解した児童数が最も多かったのは全国が１４問、本市が１３問だった。

・全国と比べて１５問中１４問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。



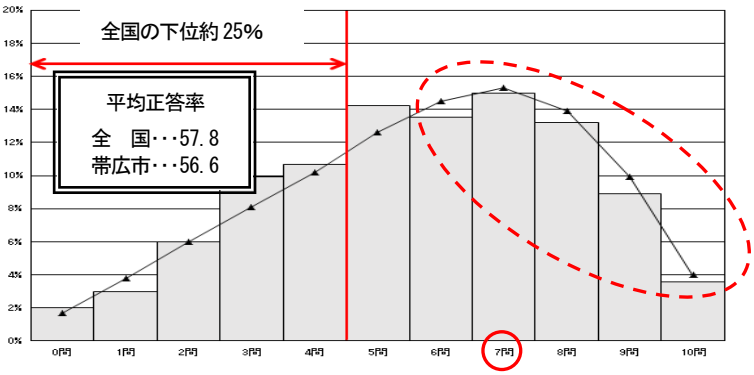
全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合



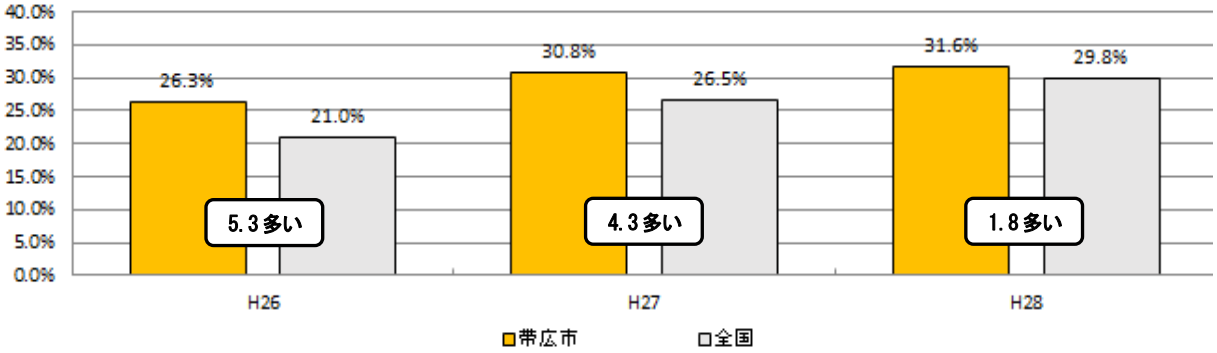
【小学校　国語Ｂ】

・１０問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国同様７問だった。

・全国と比べて、１０問中６問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。



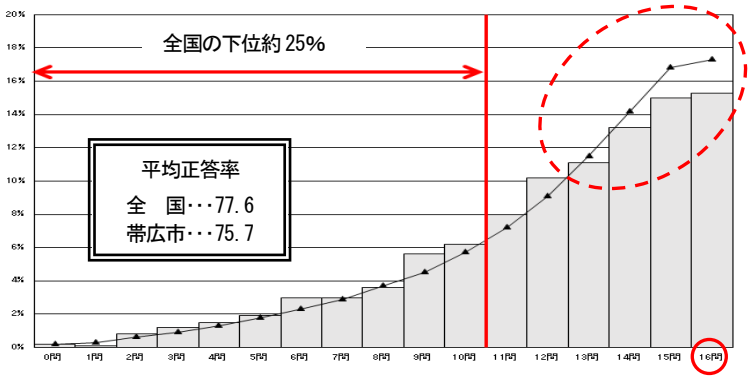
全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合



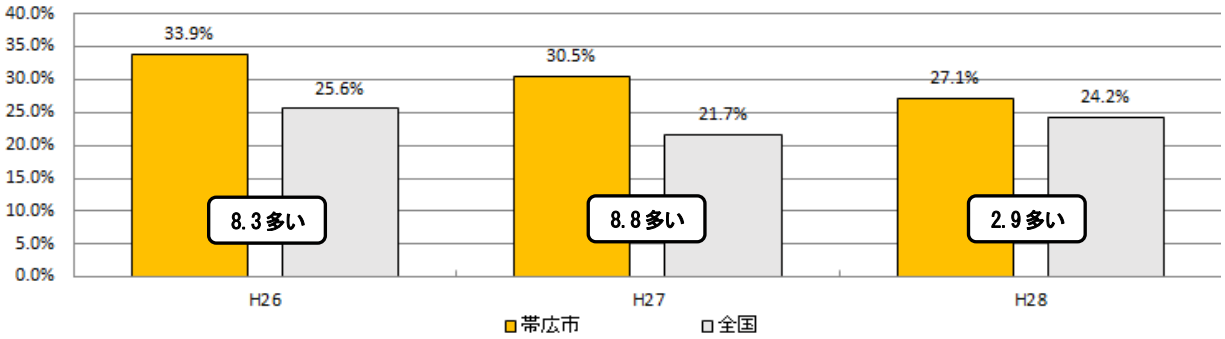
【小学校　算数Ａ】

・１６問中、正解した児童数が最も多かったのは、全国同様１６問だった。

・全国と比べて１３問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。



全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合

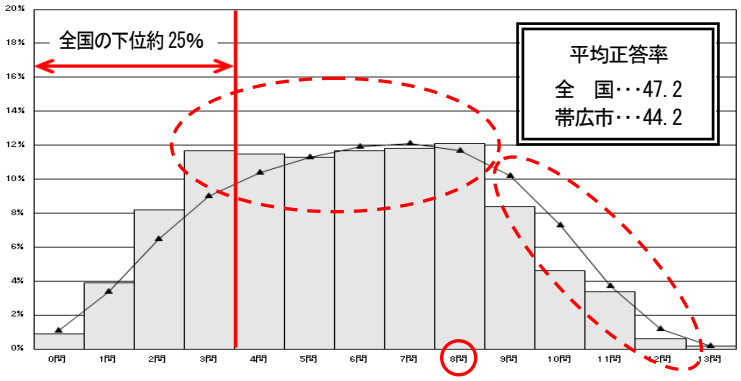


【小学校　算数Ｂ】

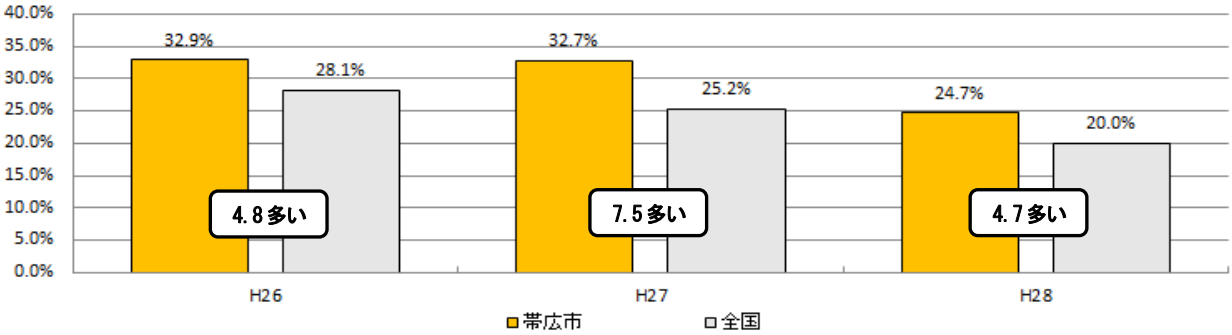
・１３問中、正解した児童数が最も多かったのは全国が７問、本市が８問だった。

・児童数の割合が３問～８問までの間に集中している。

・全国と比べて９問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。



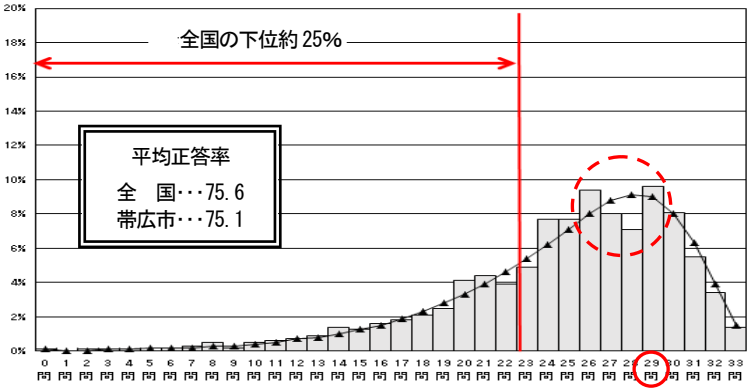
全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる児童の割合



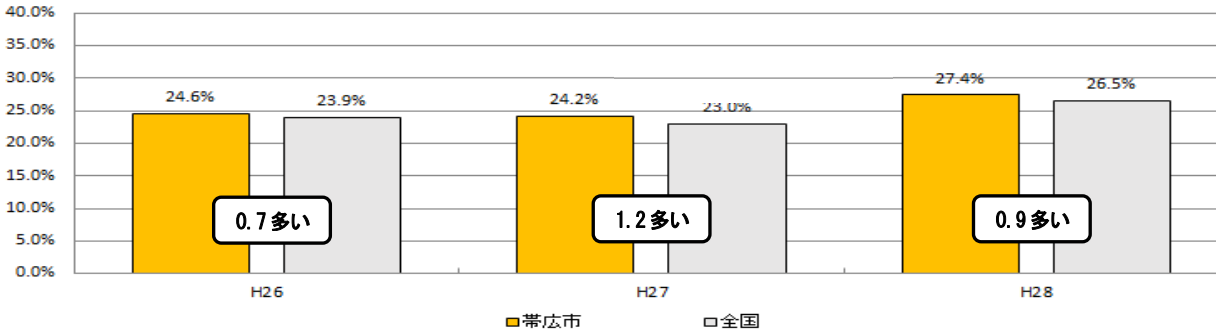
【中学校　国語Ａ】

・３３問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国が２８問、本市が２９問だった。

・２６問から２９問にかけて、全国と本市の間に、対称的な傾向が見られた。



全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる生徒の割合

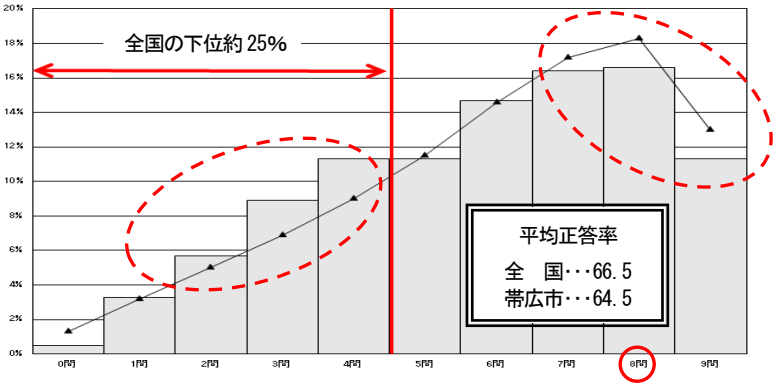


【中学校　国語Ｂ】

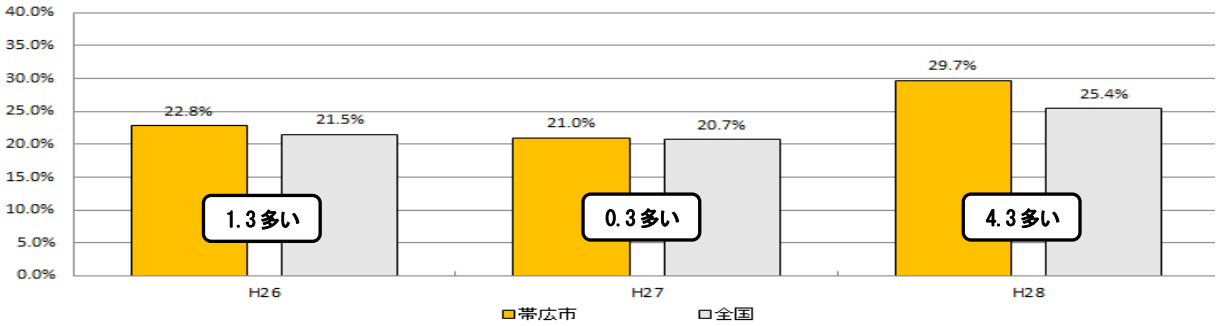
・９問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国と同様に８問だった。

・全国と比べて７問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。

・昨年度と比べて下位層の割合が増え、全国との差が大きくなった。



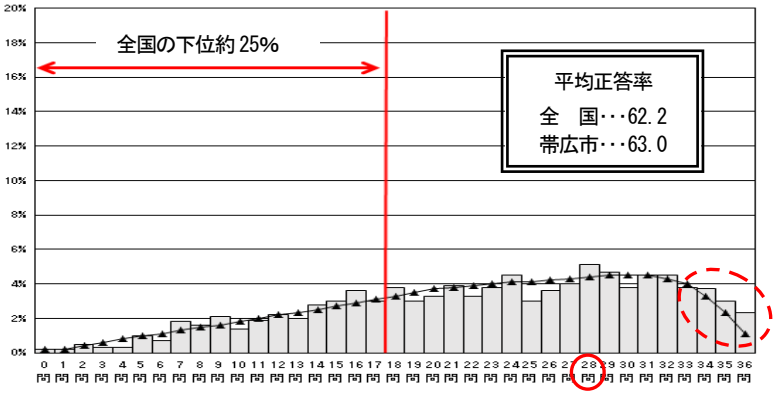
全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる生徒の割合



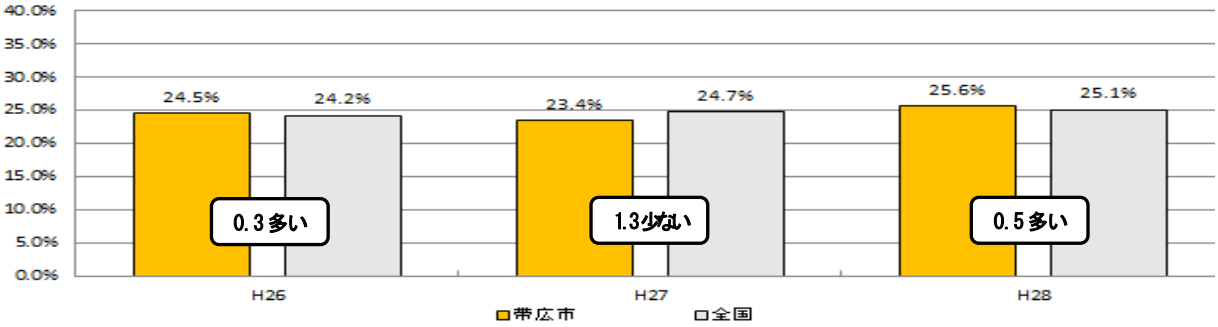
【中学校　数学Ａ】

・３６問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国が２９～３１問、本市が２８問だった。

・全国とほぼ同様の傾向が見られたが、全国と比べて３４問以上正解した上位層の割合が、本市は多かった。



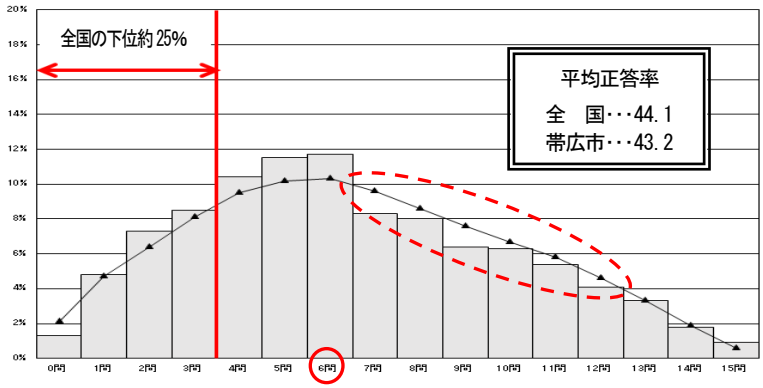
全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる生徒の割合



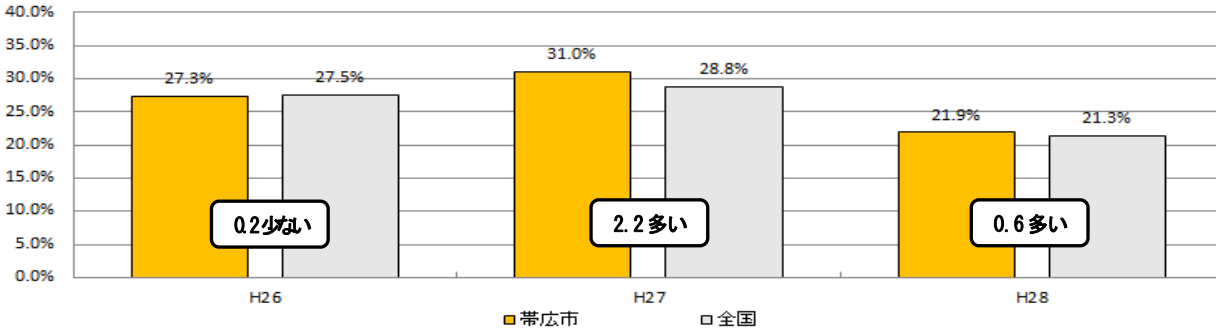
【中学校　数学Ｂ】

・１５問中、正解した生徒数が最も多かったのは、全国と同様に６問だった。

・全国と比べて７問以上正解した上位層の割合に開きが見られた。

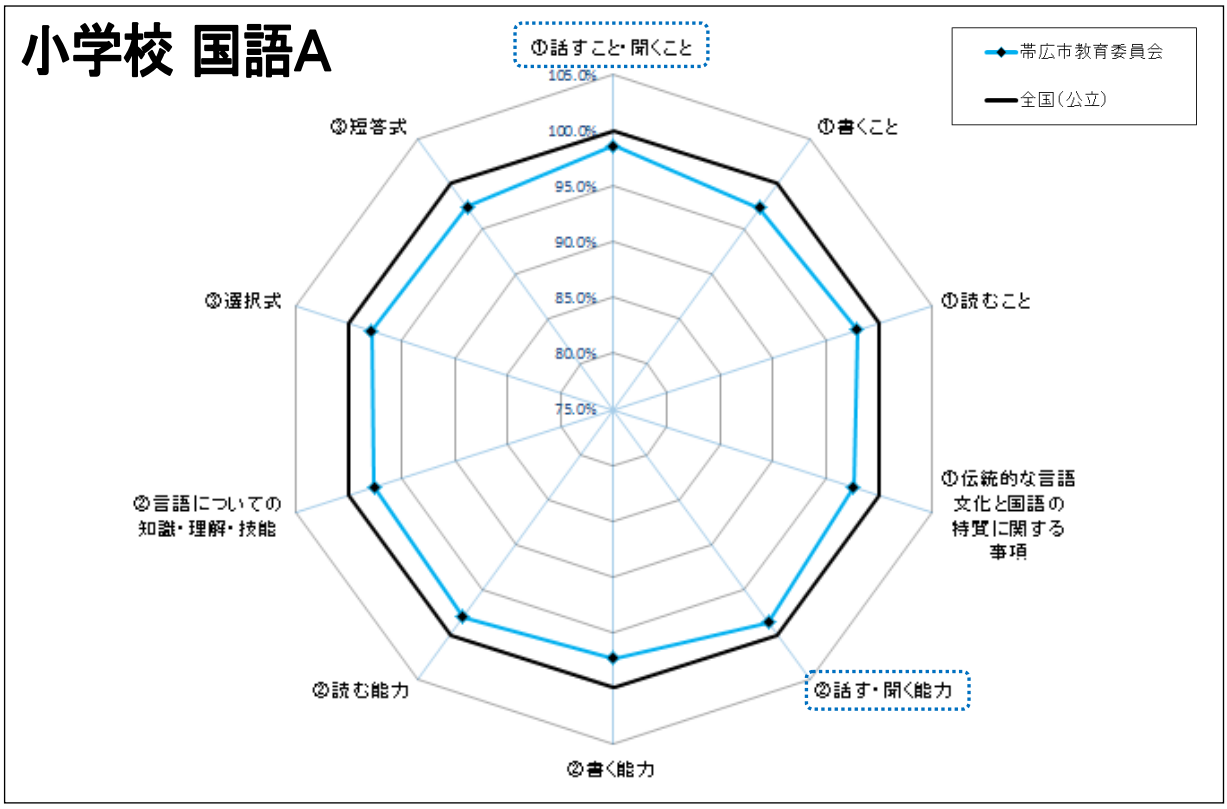


全国の下位約 25%と同じ正答数の範囲に含まれる生徒の割合

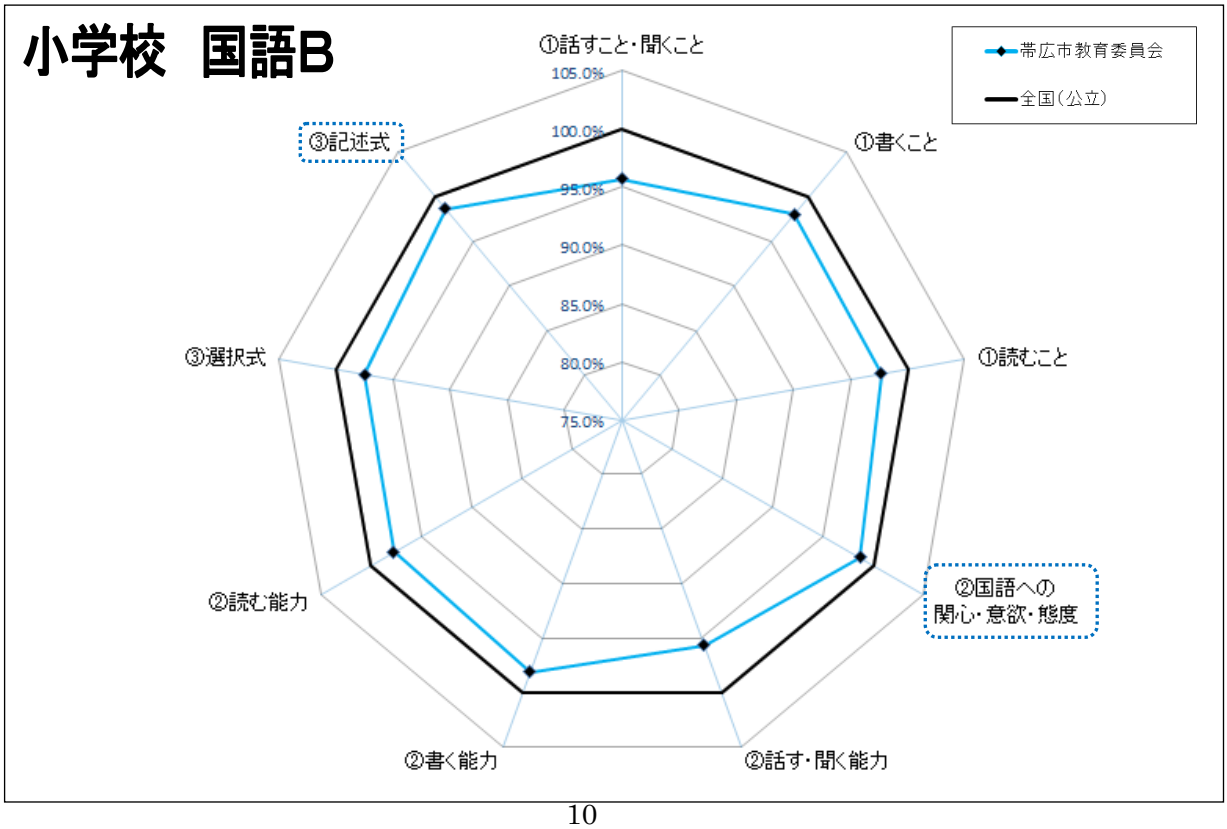


4　各領域の平均正答率（レーダーチャート図）

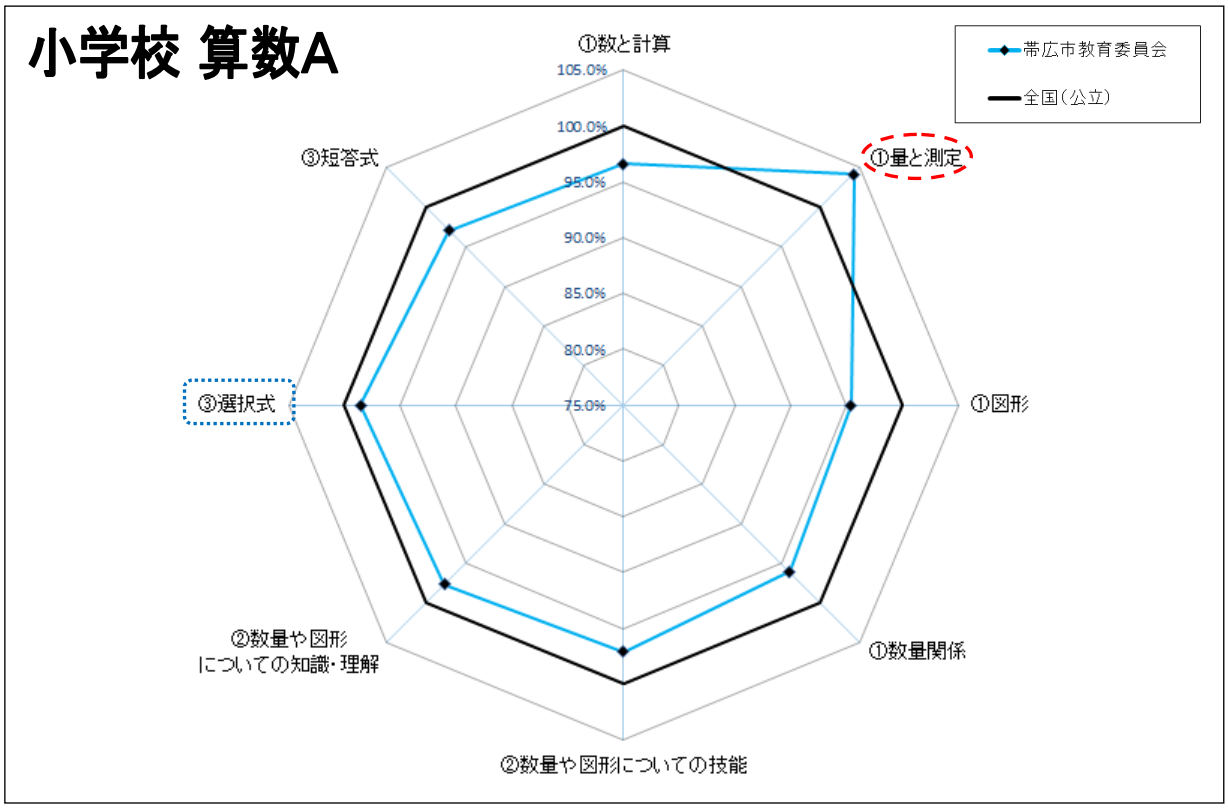
小学校国語Ａでは、４領域のうち「話すこと・聞くこと」、観点別では「話す・聞く能力」で全国との差が小さい。



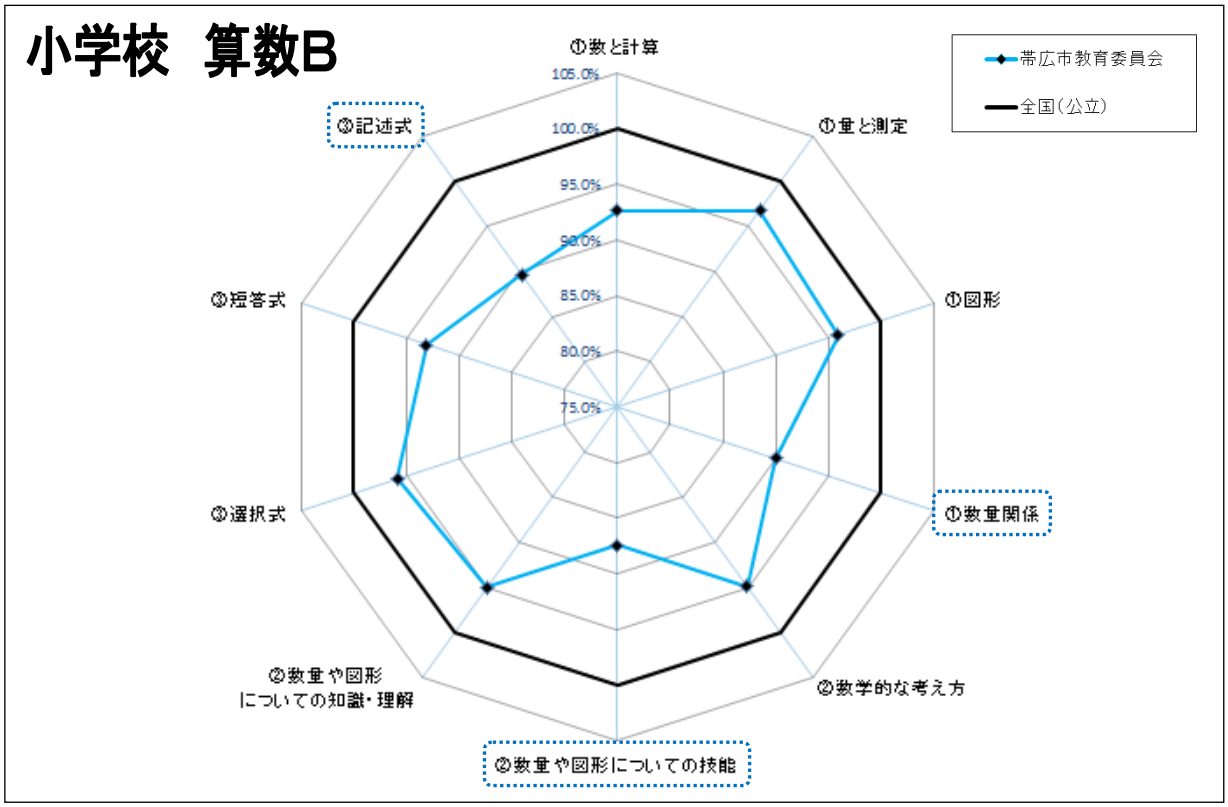
小学校国語Ｂでは、観点別で「国語への関心・意欲・態度」、問題形式別では「記述式」で、全国との差が小さい。



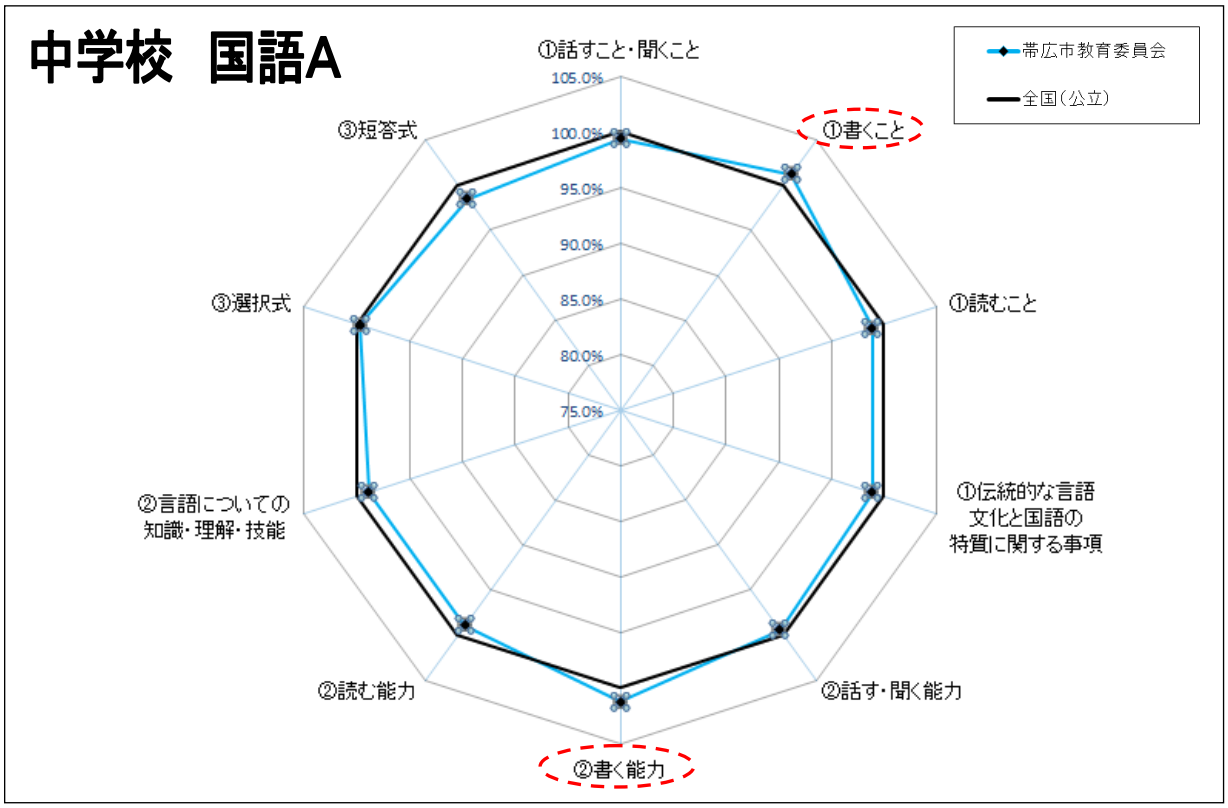
小学校算数Ａでは、４領域のうち「量と測定」で全国平均を上回り、問題形式別では「選択式」で、全国との差が小さい。



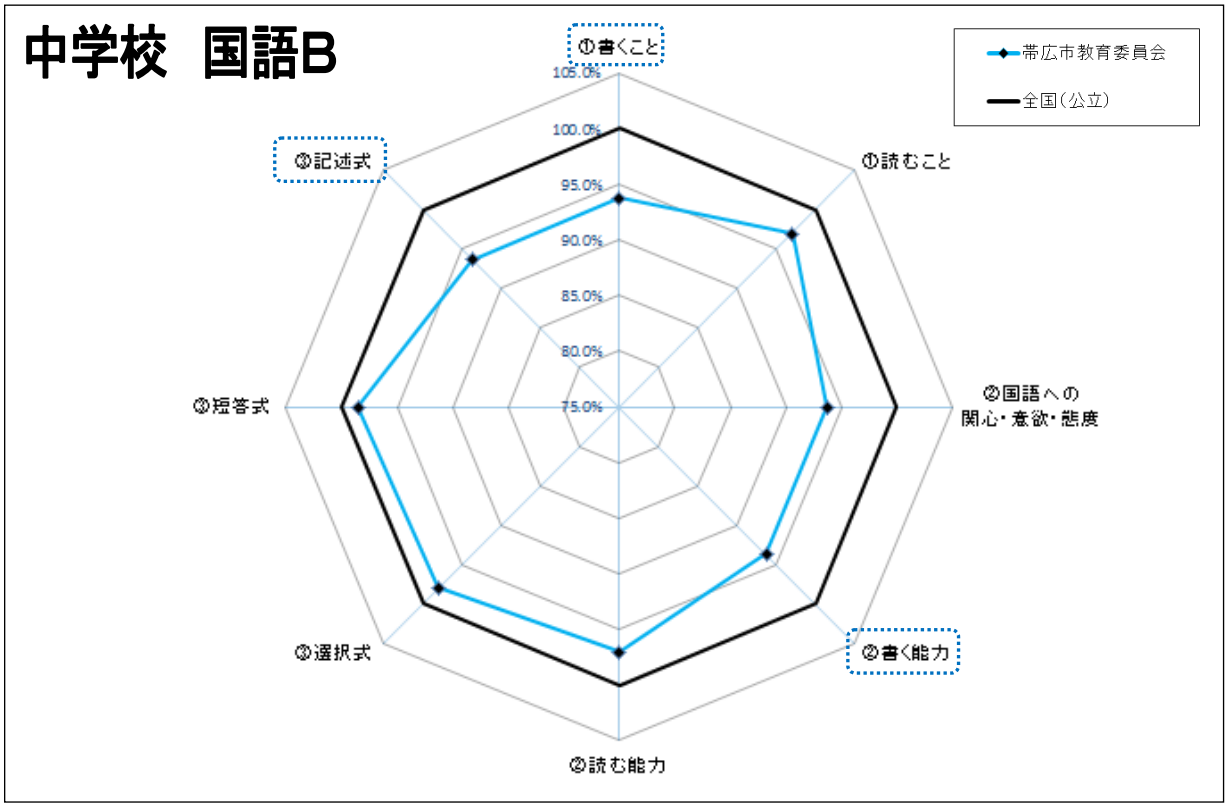
小学校算数Ｂでは、４領域のうち「数量関係」、観点別で「数量や図形についての技能」、問題形式別では「記述式」で、全国との差が最も大きい。



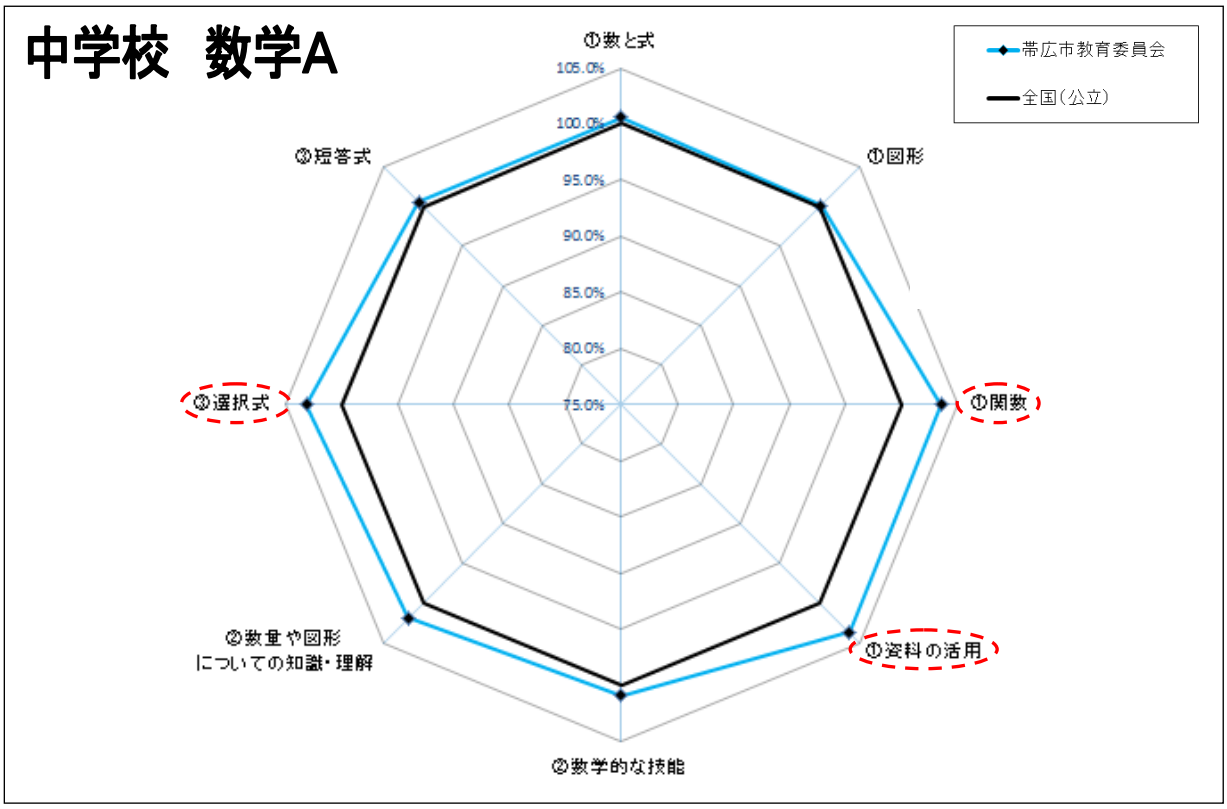
中学校国語Ａでは、４領域のうち「書くこと」、観点別では「書く能力」で、全国平均を上回った。



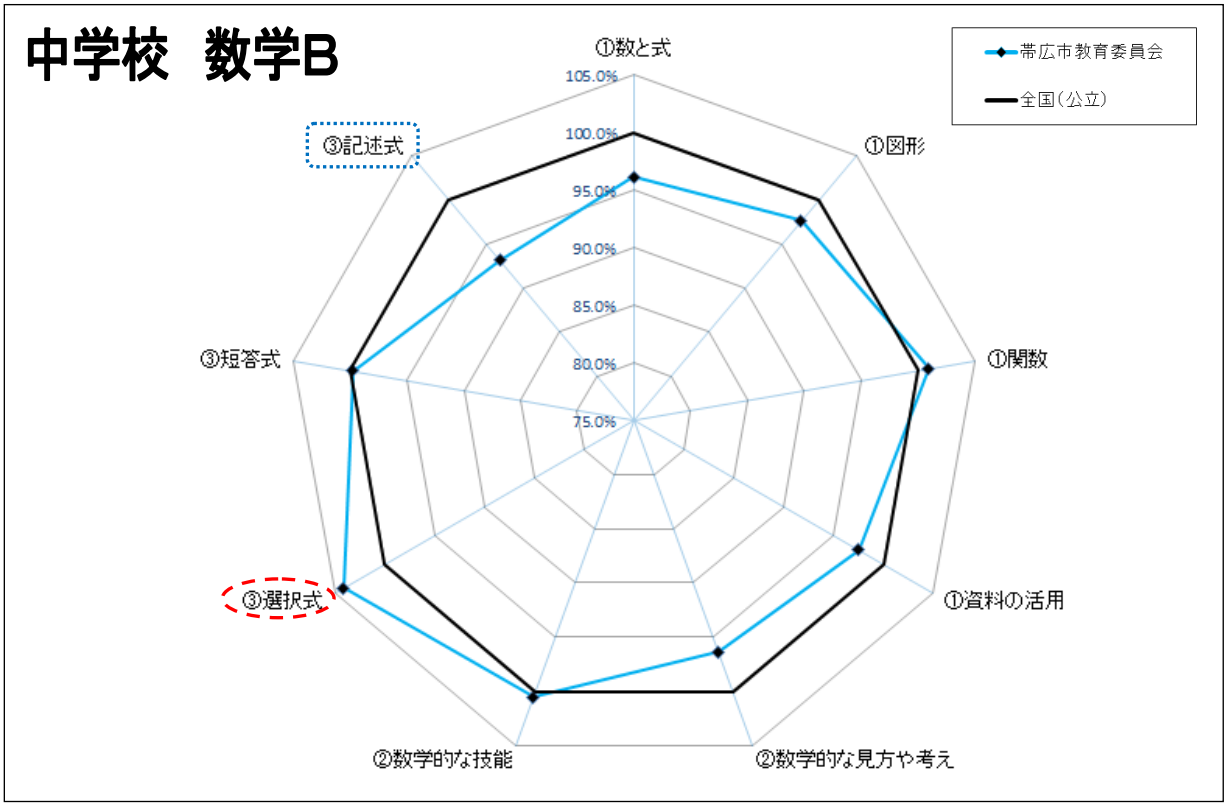
中学校国語Ｂでは、４領域のうち「書くこと」で、観点別では「書く能力」で、また、問題形式別では「記述式」で、全国との差が大きい。



中学校数学Ａでは、すべての項目で全国平均を上回った。特に、４領域のうち「関数」と「資料の活用」で、問題形式別では「選択式」で、全国平均を大きく上回った。



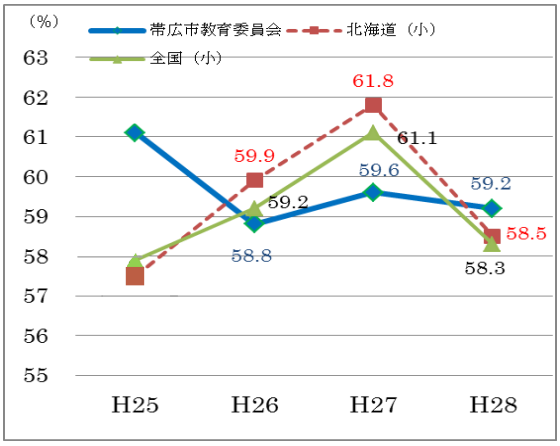
中学校数学Ｂでは、問題形式別「選択式」で、全国平均を大きく上回った。また、問題形式別「記述式」で、全国平均を大きく下回った。



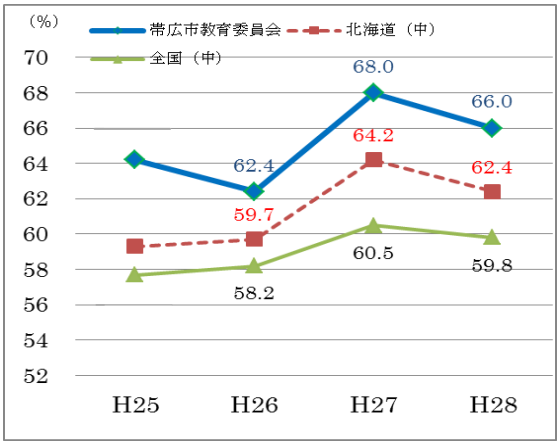
５　児童生徒の学習状況の概観（４年間の推移）について

①　国語の勉強が好きな児童生徒の割合

【小学校】

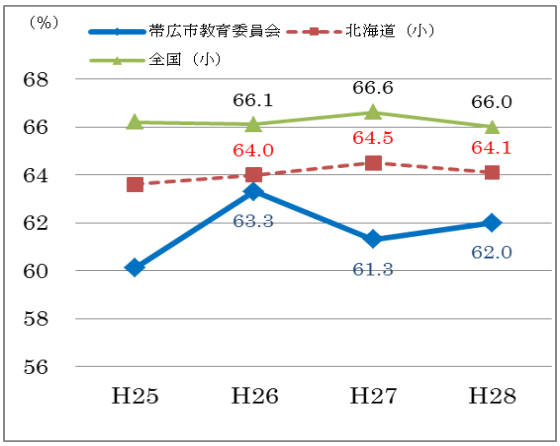


【中学校】

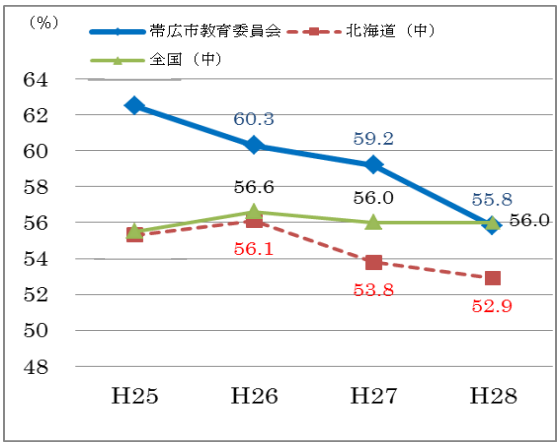


②　算数・数学の勉強が好きな児童生徒の割合

【小学校】

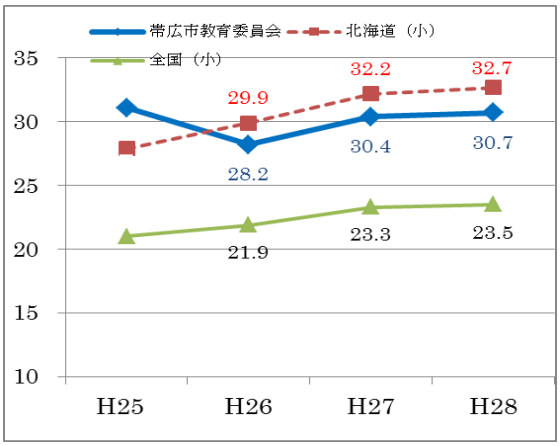


【中学校】

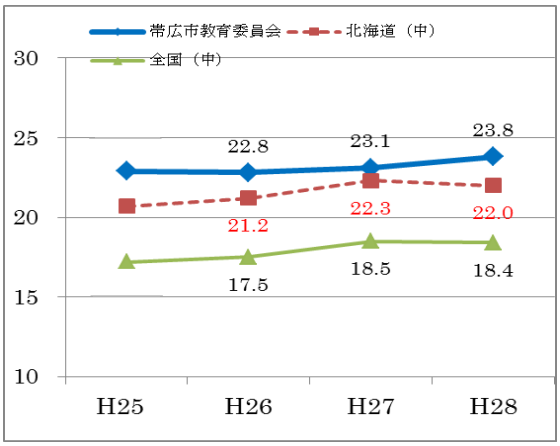


③　家で授業の復習をする児童生徒の割合

【小学校】

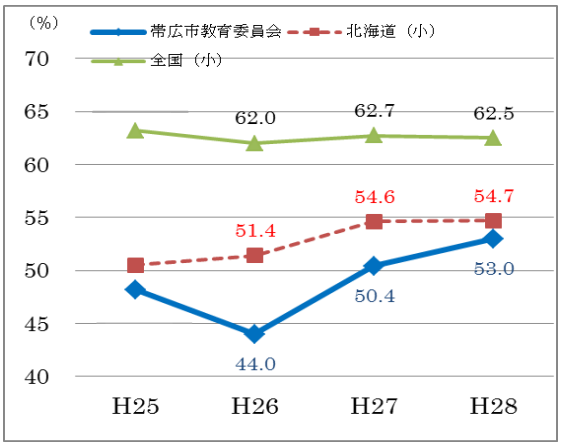


【中学校】

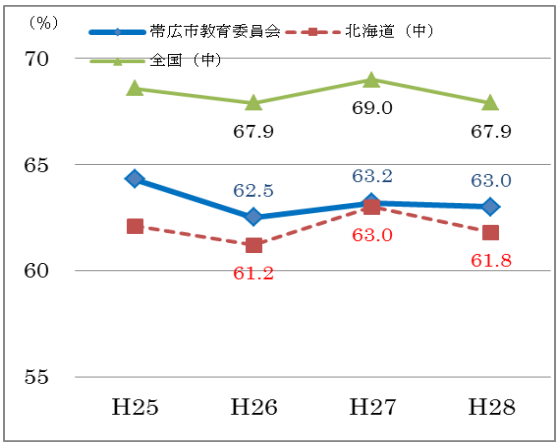


④　普段１日当たり１時間以上勉強する児童生徒の割合

【小学校】

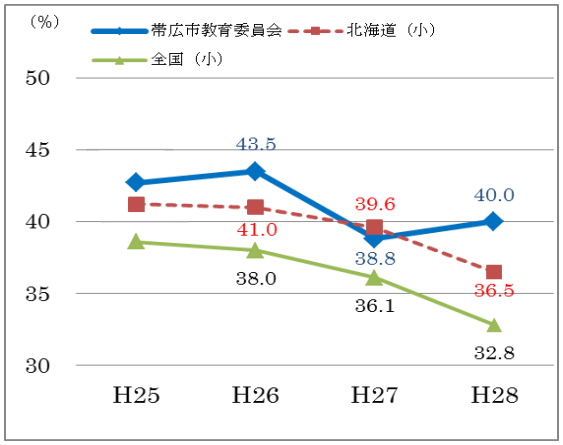


【中学校】

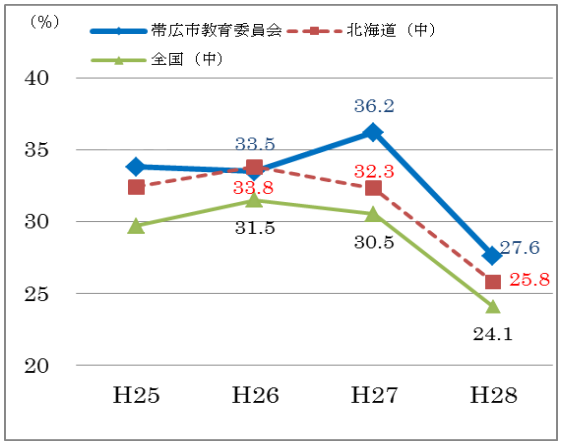


⑤　普段１日当たり３時間以上、テレビやビデオ・ＤＶＤを見たり、聞いたり（テレビゲーム除く）する児童生徒の割合

【小学校】

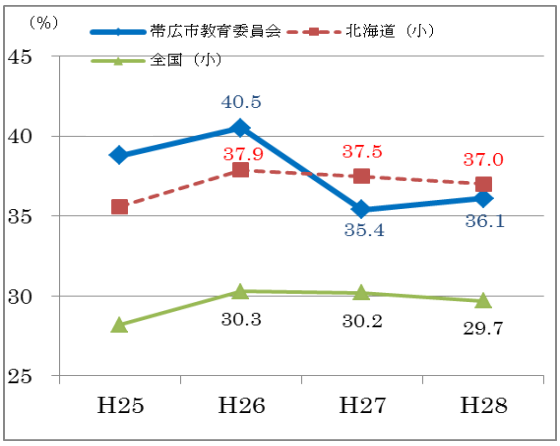


【中学校】

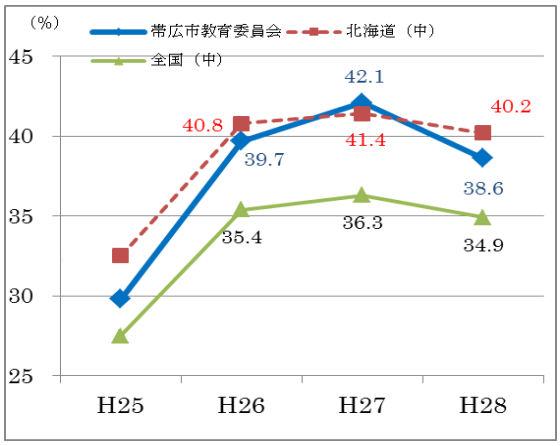


⑥　普段１日当たり２時間以上、テレビゲーム（コンピューターゲーム、携帯式のゲーム含む）をする児童生徒の割合

【小学校】



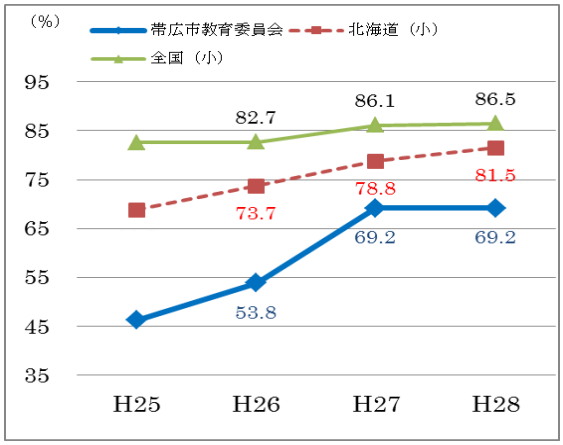
【中学校】



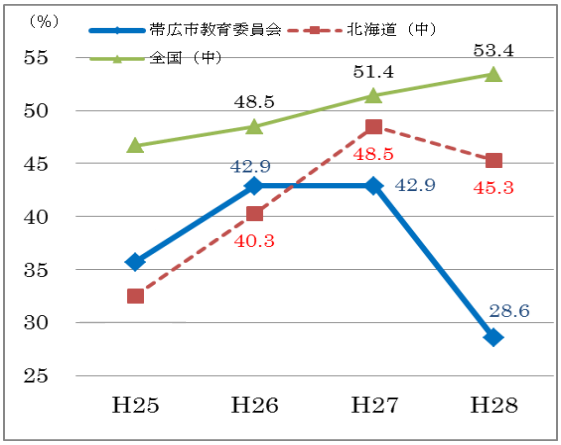
６　学校の学力向上の取組状況の概観（４年間の推移）について

①　国語の指導として、家庭学習の課題（宿題）を「よく与えた」学校の割合

【小学校】

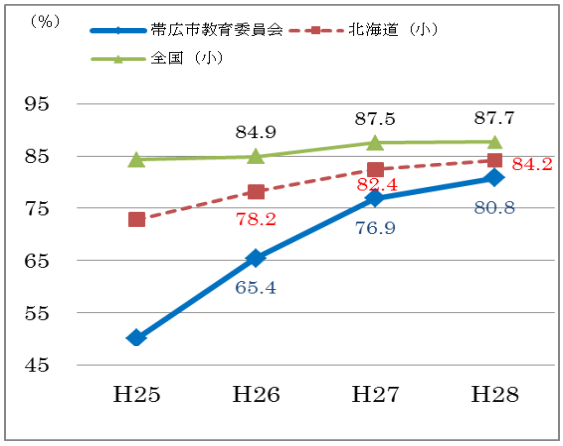


【中学校】

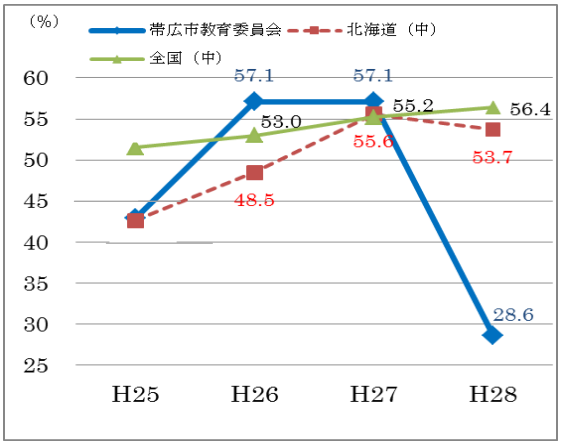


②　算数・数学の指導として、家庭学習の課題（宿題）を「よく与えた」学校の割合

【小学校】

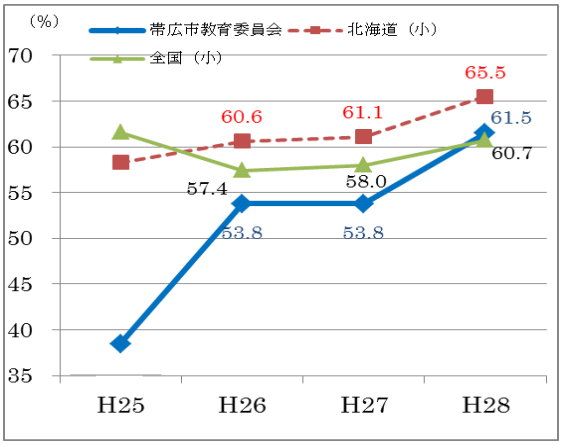


【中学校】

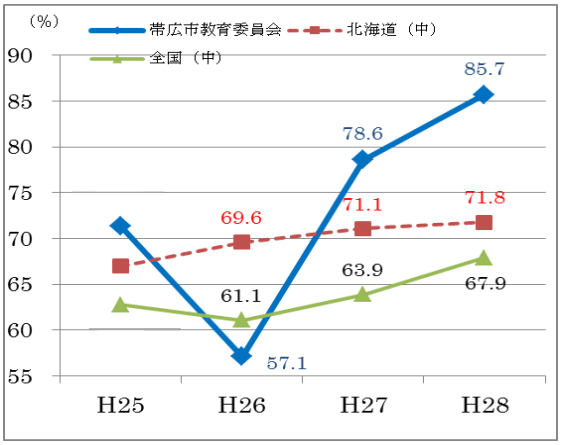


③　学習規律（私語をしない、話をしている人の方を向いて聞く、聞き手に向かって話をする、授業開始のチャイムを守るなど）の維持の徹底を「よく行った」学校の割合

【小学校】

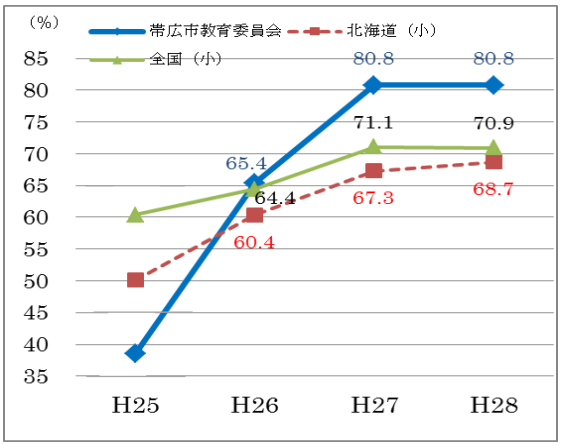


【中学校】

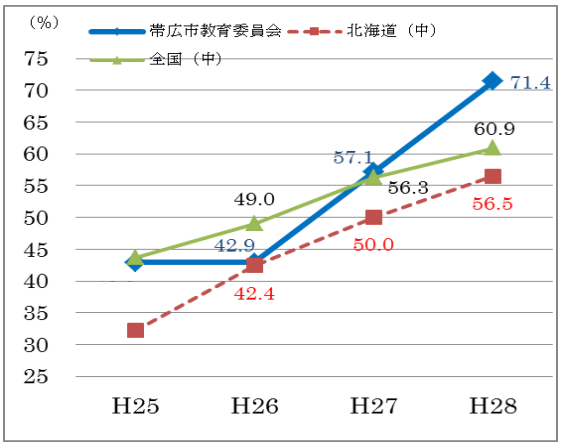


④　授業の冒頭で目標を児童生徒に示す活動を計画的に「よく行った」学校の割合

【小学校】

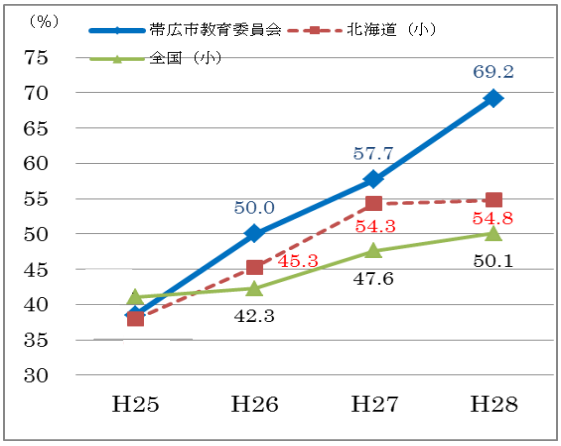


【中学校】

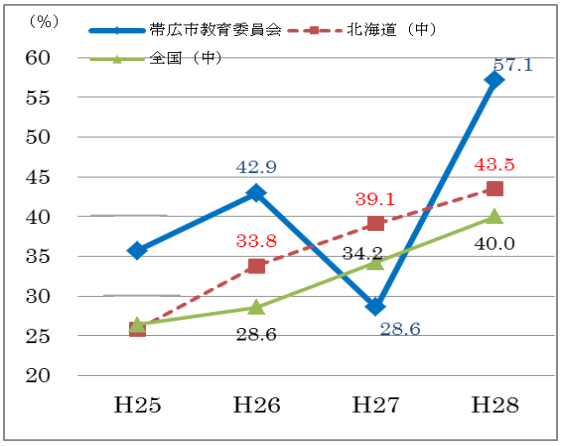


⑤　授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に「よく行った」学校の割合

【小学校】



【中学校】



７　考察

【児童生徒の学力の状況について】

小学校においては、４科目とも全国平均を下回ったものの、昨年度と比較すると、全国との差が縮まる傾向が見られた。特に、昨年度５ポイント程度差があった算数ＡＢにおいて改善が見られた。

中学校においては、数学Ａにおいて全国平均を上回り、数学Ｂにおいては全国平均を下回ったものの、全国との差が縮まる傾向が見られた。

これらは、各学校が学校改善プランに基づいた学力向上に係わる取組が反映されたものと考える。また、基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得のために、基本的な学習内容の重点的な指導や、繰り返し・反復指導等の充実を図るなど授業改善が着実に進んでいるものと思われる。

【児童質問紙から】

小学校、中学校において、「普段１日当たり１時間以上勉強する」児童生徒の割合は、依然として全国との差が大きく課題と考える。

「１日当たり３時間以上テレビなどを見る」「１日当たり２時間以上ゲームをする」児童生徒の割合は、中学校では改善傾向が見られたのに対し、小学校では増加傾向が見られた。

また、テレビを見たり、ゲームをする時間が「４時間以上」と答えた児童生徒の割合は、依然として全国より高くなっている。

このことから、引き続き学校として児童生徒に家庭での学習の進め方を指導するとともに、保護者と連携し、生活リズムチェックシートなどを活用しながら児童生徒の１日の生活リズムを整え、家庭での学習の習慣や有効な時間の使い方などを指導・定着させることが必要と考える。

【学校質問紙から】

小中学校ともに、授業の冒頭で目標を児童生徒に示す活動や、授業の最後に学習したことを振り返る活動を「よく行った」と答えた学校の割合は高く、全国を大きく上回っている。しかし、児童生徒への同様の質問に対する答えの割合は低く、ここ数年学校と児童生徒の意識の差が見られる。

学習規律に関する指導について昨年度と比較すると、小学校、中学校ともに大幅に改善した。特に中学校においては、どの学校においても学習規律の徹底を図っている現状が見られる。

今後も、各学校おいて本調査の結果を学校全体で共有し、組織として児童生徒の学力の向上と生活習慣の改善に取り組んで行くことが大切である。

８　改善の方策

（１）日常の授業改善に努める。

①　授業時間の導入段階に目標（課題・めあて）を提示し、児童生徒に課題意識をもたせるとともに、授業時間の終末段階では今日学習したことを確認するまとめをする。

②　発問を精選する。

③　学習量の確保や定着・まとめの時間をしっかりと確保する（タイムマネジメント）。

④　その学年で身に付けなければならない学力を確実に身に付けさせる指導に努める。

⑤　習熟の程度に応じた指導、少人数指導など、指導方法の工夫・改善に努める。

⑥　基礎的・基本的な学習内容の重点的な指導や、繰り返し・反復指導等の充実を図る。

（２）各学校において学習規律を設定し各教室に掲示するなど、学校全体で組織として統一した取組を徹底する。

（３）家庭学習の時間の確保と学習習慣の定着のため、より一層家庭と情報や実態を共有し、連携を強化する。

９　おわりに

学力や学習状況については、これまでの取組の成果が徐々に表れているところもありますが、まだまだ改善が必要です。各学校においては、それぞれの取組を徹底し、継続して取り組むことが、学力や学習状況を向上させる一番の近道であると考えています。

学校や教育委員会は各年度の結果を受けて改善方策を再構築できるものの、個々の児童生徒にとっては一年一年が、かけがえのない時間であることを胸に刻み、今後も学力や学習状況を向上させる具体的な取組を進めてまいります。

また、それらの情報は、帯広市のホームページ（教育行政“学力向上の取組”）において、適宜、公表・発信してまいります。

平成２９年３月　帯広市教育委員会